

Over the borders

東京都 拓殖大学第一高等学校 2年 柳川 樹希

保育園に通っていた頃よくお散歩に行っていた公園のベンチにいつも腰掛けていたおじいさん。大きな荷物を抱え無精ひげを生やしたその人をこちらがどれほど見つめても、その目に私は映らない。「いっちゃん、そんなに見ちゃだめだよ。近付かない方がいいよ」

友達に言われ私は我に振り返りの輪に戻っていく。これが恐らく私の中で最も古いホームレス状態の人の記憶だ。

それから十数年、駅で公園で道端で、ホームレス状態の人を見るたびに自分とは全く関係のない存在として誰も気に留めない空気感と、意図せずもそれに同調する自分へのやるせなさは澱たまりのように心の奥底に積もり、消えることはなかった。そして中学3年生で新型コロナウイルス第一波を経験した時、さまざまな報道の中で自分が失業関連の報道にばかり目が行くことに気づき、失業者をなくすこと、それこそが自分のすべきことであると確信した。

高校に入学するとSDGsの達成を目指す学生団体に入った。SDGsは17個の目標が個々にあるのではなく、一つ一つが複雑に絡み合っている。そこで私は失業者をなくすためにはどうしたらよいか考えながら、筆舌に尽くし難いたくさんの経験をした。そしてこの夏、NPO法人Home Door代表の川口加奈さんが書いた一冊の本に出合った。つらいことがあっても諦めずホームレス問題解決に挑

み続ける川口さんの姿に私は感激した。早速メールを送り夏休み中1人で大阪のHome Doorの事務所を訪ねることが決まった。

Home Doorを訪問し、事務所の方が、ホームレス問題はさまざまな問題の複合問題であり失業だけが原因でないこと、一流企業に勤めていた人が職場の人間関係や体調不良で仕事を辞めホームレスになってしまったことなどを話してくれた。マジョリティーの一員として生活していたはずがある日突然ホームレス状態になる。それは決して珍しいことではなく誰にいつ起こってもおかしくない。それなのに人々はホームレス状態の人を自分と全く違う世界の人であるかのように疎み、見ないふりをする。私もまたその偏見から逃れられていないと気付いた。

自分を変えたい。この偏見から自分の足で抜け出したい。そう思い私はホームレス状態の人に話し掛けることにした。駅前のベンチのホームレス状態のおじいさんが熱中症になってしまっているのではないかといつも思っていたので、塩分補給タブレットを渡すことにした。今思えば本当にちっぽけなことだが、一刻も早くこの鬱屈うっくつとした思いから逃れたかった。

8月の暑い日、意を決して話し掛けた。

「今日、暑いので、これ、あげます」

そう言って手を差し出す私をおじいさんが驚いたように見つめる。そして、

「どうしてっ？」

と尋ねた。優しい声だった。だが私の頭には殴られたような衝撃が走り、ぼうぜんとした。不思議と涙が止まらなかつた。どうして？ どうして私は話し掛けたの？ どうして塩分タブレットをあげたの？ 自問し続けた。だがその答えは、はっきり1つに決まっていた。ホームレスだったからだ。おじいさんがホームレスだったから、私は話し掛けたし、塩分タブレットをあげた方がよいと思ったのだ。

結局私は、相手がホームレスだから自分とは全く違う世界の人である、という境界線の意識から逃れられていなかったのだ。

私はホームレス状態の人を見るたびにその人の生活や背景に思いをはせる。彼らを気の毒だとも思うこともあるし、自分と環境が全く異なる人間だとも思う。だが、あの日から変わった考えがある。それは、「ボーダーはあってしかるべき」ということだ。ボーダーを認識するということは、自分と異なる相手のパーソナリティを認めるということである。自分と同じ人など一人もいない他人だらけの世界の中で、相手との違い、すなわちボーダーを取り払い皆が同じように暮らせる世界が本当に目指すべき姿だろうか。私はそうは思わない。Home doorの方が言っていた「人の数だけ理由がある。だからその人に合わせた支援策が必要」という言葉が忘れられない。相手との違い、ボーダーをはっきりと認識した上で、その人のそばに行きたいと思えばボーダーを越えること、それがボーダーレスであると私は思う。ボーダーレスはその刷新的で洗練された響きとは裏腹に、いざボーダーを目の当たりにするとその荒々しい眺めに戸惑うこともある。それでも「誰一人取り残さない」世界にするためには、その人のそばに行き、そのボーダーを認識しなくては本当に77億人誰も取り残されていないか分からないのではないか。ホームレス状態で苦しむ人との間にはっきりと引かれたボーダーを見て、戸惑い、私はそれでもなお、そのそばに行き手を差し伸べたいと思う。ボーダーを越えて。

